

り方を鮮烈に描いた本書は大いに参考とすべき1冊である。

(加藤 晴美)

菊地俊夫・有馬貴之編：『自然ツーリズム学（よくわかる観光学2）』朝倉書店、2015年2月刊、175p., 2,800円（税別）

本書は、朝倉書店から刊行されている「よくわかる観光学」シリーズ内の1冊であり、刊行済みの『観光経営学』（岡本伸之編、2013）に次いで上梓された。今後は『文化ツーリズム学』の発行が待たれる。

本書『自然ツーリズム学』の書名にある、自然ツーリズムとはどのようなものか、疑問を抱く人も多いであろう。これまでに日本で刊行された、自然地域におけるツーリズム現象に関する書物では、主に「自然観光」という語が用いられ、また説明がなされてきたと思われる。本書の1章は、「自然観光」とは「自然」を見るという行為に重きがおかれた用語であると指摘する。一方、「自然ツーリズム」はnature-based tourismの和訳とされ、「自然」を感じることでできる目的地へと移動すること、さらに移動の間に生じる一連の行動すべてを指す。つまり、自然ツーリズムは自然観光を包含したより広い意味をもっている。日本人のみならず世界中で、人びとの観光行動が多様化している。この点でも自然観光という語で、現在の「自然地域における観光（またはツーリズム）」を説明できない。それゆえに、現在、「自然ツーリズム」なる語の一般化が求められ、本書の出版は時宜にかなったものであろう。

本書では、「自然」の捉え方についてもある程度明確にしている。すなわち、自然を人間の手入れの有無によって捉えるよりも、視覚的に生物や

土、水を感じられるかどうかという点を重視しているのである。このように本書で用いる基本的な用語の意味を明確にした後、目次にはない分類ではあるが、基礎編、実践編、応用編へと内容が進行していく。

基礎編では、自然ツーリズム学に係わる理学的学問分野の基本的視点が解説される。具体的な分野としては、地理学（2章）、生態学（3章）、土壌学（4章）、情報学（理学と工学の双方の視点をもつ5章）がとりあげられている。それぞれに関して、学問的な視点が説明された後に、持続的な自然ツーリズムを実現するために、どのような点が重要であるかが述べられている。章によっては、自然ツーリズムに関する事例の紹介もあり、内容を理解する助けになっている。

実践編は、自然ツーリズムの実態や諸特徴について、「見方・考え方」を説明している。取り上げられているのは、エコツーリズム（6章）、ルーラルツーリズム（7章）、ジオツーリズム（8章）、世界遺産・国立公園におけるツーリズム（9章）、都市域におけるツーリズム（10章）である。6章と9章では、制度面からみた自然環境保全の説明に重点がおかれている。一方、残りの章では具体的な地域事例の説明が丁寧になされており、理解が深まる。

応用編では、自然ツーリズム学の社会的意義を考慮し、複数のトピックに関して研究者による提起がなされている。トピックとしては、オーバークース（11章）、災害とリスク管理（12章）、地域計画や地域づくりへの貢献（13章）、環境教育（14章）、目的地での管理運営計画（15章）がある。いずれのトピックも、自然ツーリズムを扱うさまざまな研究分野における、重要な研究視点とみることもできる。

最終章（16章）では、自然ツーリズムの先進地とされるニュージーランドの事例が紹介され

る。自然の保全と適正利用に関して、その担い手養成に関して詳細な説明がなされている。とくに、日本ではかなり不足しているレンジャーや解説者（インタープリター）の重要性を指摘している点で、示唆に富んでいる。

本書で扱う自然ツーリズムについて、その一般性を説明する本は、これまでも多く刊行されてきた。しかし、そのすべては、自然ツーリズムの中のある部分だけを取り上げたものであった。たとえば、本書の11章から15章で取り上げられたツーリズムの形態に関しては、それぞれに複数の本が発行されている。たとえば、エコツーリズムやルーラルツーリズム（またはグリーンツーリズム）については相当数の本がある。しかし、本書はそれらを総合的に扱っている点が大きな特徴である。というのも、自然環境を対象としているツーリズムに対して、これはエコツーリズムで、一方これはジオツーリズムのような分類は、ゲスト側、ホスト側双方に意味がないからである。ゲストは、自然と触れあうことを楽しみにして活動しているのであり、それにはどのような活動が存在するのかを整理し、活動が展開する地域とどのような関係があるのかを考える立場が重要であろう。本書はこの立場に基づいており、それを試みた最初の本という位置づけができる。この点で、本書を多くの学生・研究者のみならず、自然ツーリズムに係わる実務者に勧めたい。

しかし、本書にはいくつかの難点がある。そのひとつは、本書が編者を含めて14名で執筆されていることであり、それによって章ごとのスタンスや主張が異なっている点である。また同様に、用語使用についても混乱がみられる。観光とツーリズムはもともと区別や定義の難しい語ではある。本書1章で自然ツーリズムと自然観光の違いは説明があるものの、それに続く各章でこの説明通りに使用されていない例が散見された。読者は

これらの点に注意して読まなければならないだろう。

（呉羽正昭）

山下亜紀郎著：『水環境問題の地域的諸相』古今書院。2015年2月刊，186p.，6,000円（税別）

地理学において「水」を扱う分野は、大気中、地表面、地表面下で生じている水輸送と水循環などを研究する自然地理学の水文学、そして河川・湖沼の水資源利用などが人文地理学の都市地理学や農業地理学で多くの研究蓄積が見られる。しかし、残念ながら自然地理学分野の研究と人文地理学分野とのコラボレーション研究は進んでいるとは言えない。自然地理学的視点での水循環の研究は、いかに人類が水を持続的にかつ有効に使っていくかを考える上で重要な科学的な根拠を提示してくれる。しかし、水利用には地域による偏在が見られ、その地域差を生み出す要因を探るのは人文地理学的な視点の研究に頼るところが大きい。すなわち水の研究は、地球の自然システムを探求するだけでなく、経済・社会・文化活動という人間の営みに伴う人工システムとの相互作用が重要である。

本書は、大学院時代から水利用の研究を実施してきた著者が、人文地理学的視点に軸足を置きつつ、人間活動だけではなく、流域の水資源量といった自然環境のデータを組み入れながら水に関わる人間－自然の相互作用について論じた研究成果である。そして、著者は自然地理学分野だとか人文地理学分野だとかにこだわらずに「水環境問題」を総合的な視点から捉えようとする。では、本書の内容の紹介に移ろう。

まずI章「水環境の質的变化と観光」では、諏訪湖を観光資源として利用する貸船業や釣舟業を